

『今鏡』に登場する和歌を詠む人々

——和歌作者への評価の目——

陳 文 瑤

はじめに

『今鏡』は、(伝承)について並々ならぬ関心を持っており、様々な(伝承)に関する事柄に関心を傾けるのみならず、自らも(伝承)を伝える一員になろうとした⁽²⁾。その語られた様々な事柄の内、和歌が大きな比重を占めていることは注目すべき事象といえる。そのため、例えば和歌を語る記事内容を具体的に掘り下げていった場合、『今鏡』が(伝承)しようとする内実が浮かび上がると推察される。その一階梯として、『今鏡』が和歌を詠む人々をどのように語っているのかをみておくことが必要であると考えられる。

『今鏡』に登場する和歌を詠む人々は一三三人である。それに対して『栄花物語』では二一七人であり、『大鏡』⁽³⁾では四九人である。

『今鏡』は、二作品の中間に位置しているといえる。「人数」という点から見ると、『今鏡』は『栄花』の二一七人に遙かに及ばない。しかし『今鏡』は、「歌詠みにおほしき」「和歌の道にすぐれておほす

る」「歌などもよく詠ませ給ひしにこそ侍れ」「和歌などをかしく詠ませ給ひける」など様々な評価に関する表現を持ち、詠まれた和歌の内容のみならず、和歌作者としての点からも評価を下しているのである。その態度は、他の二作品とは明らかに違っている。

評価に用いられた各語については更なる考察が要されるが、本稿では、和歌作者への「評価」に着目し、概観ではあるが和歌を詠む人々を語る際に現れる『今鏡』の性格の一端を解き明かす。

一 和歌作者への評価の目

概して和歌を詠む人々については、ただ記述の一部として、淡々とその詠歌のみが挙げられている。例えば、上東門院彰子が出家した折の、藤原顕基との唱和について、

『1』長暦三年五月七日、御髮剃させ給ふ。顕基の入道中納言、

世を捨てて宿を出でにし身なれどもなほ恋しきは昔なりけり

と詠みて、この女院に奉り給へる御返し、

つかのまも恋しきことの慰さまばふたたび世をば背かざらまし

と詠ませ給へる。(すべらぎの上第一「望月」(上・七七〜七八頁))

と語られている。顕基と彰子の和歌作者としての力量、或いはその詠歌の巧拙優劣については、特に触れてはいない。

『1』のような語り方は、『今鏡』において和歌を詠んでいる一三三人中四十八人(36%)に該当している。『大鏡』の四十九人中二十四人(49%)や『栄花』の二一七人中一九五人(89%)と比べると、

明らかでないが認められる。それでは、和歌を詠む人々に対する『今鏡』の関心の持ちようはどのようなものであろうか。

まず、『2』を見てみよう。

『2』御母女院、御女の一品の宮など具し奉らせ給ひて、住吉にまうでさせ給ふとて、

住吉の神はうれしと思ふらむむなしき船をさして来たれば

と詠ませ給へる、帝の御歌とおぼえて、いとどおもしろくもき

こえ侍る御製なるべし。

(すべらぎの中第二「手向」(上・一二八頁))

『2』は、讓位後の後三条帝が、母陽明門院と娘聡子内親王を連れて住吉詣した際に詠じた歌について語る条である。詠歌状況の記述の続きにその詠歌について評価している。和歌作者としての優劣には直接目を向けていないものの、その人の詠歌を評価している。

『2』のような語り方は、『今鏡』では一三三人中三十人(22.6%)に該当している。『大鏡』の四十九人中十一人(22.4%)や『栄花』の

二七人中九人(4.1%)と比べると、『今鏡』は詠歌そのものについて評価しようという姿勢が見える。

次に、『3』のようた。

『3』この大納言の太郎には、東宮の大夫公実と申しき。経平の大貳の女の腹におはす。みめもきよらに、和歌などよく詠み給ふときこえ給ひき。(ふぢなみの下第六「竹のよ」(下・八七頁))

と公実に対して「和歌などよく詠み給ふときこえ給ひき」と記述す

るように、和歌作者としての力量を評価しているのは、『今鏡』では一三三人中五十五人(41.4%)である。『大鏡』の四十九人中十四人(28.6%)や『栄花』の二七人中十三人(6%)と比べると、明らかに『今鏡』は他の兩作品より和歌作者としての優劣について関心を傾けている。

二 評価される人々の位相

和歌作者の力量を評価されている『今鏡』の五十五人には、鳥羽帝などの帝、具平親王などの親王、藤原公実などの上級貴族、源俊頼などの中級貴族、柿本人丸のような下級貴族、能因法師などの僧、摂津などの女性和歌作者、と様々な位相の人たちが含まれている。一方、『栄花』において和歌作者の力量を評価されている十三人の顔ぶれは、村上帝などの帝、藤原実頼などの上級貴族、紀貫之などの中級貴族のほか、具平親王、禊子内親王、藤原寛子の三人である。『栄花』は上級・中級貴族のみに評価の目を向けている。また、『大鏡』において和歌作者としての力量を評価されている十四人には、醍醐帝などの帝、藤原良房などの上級貴族、藤原道信などの中級貴族、凡河内躬恒などの下級貴族のほか、藤原道綱母がいる。道綱母以外には女性和歌作者が含まれていないことから、『大鏡』は男性の和歌作者にしか評価の目を向けていなかったといえる。

『栄花』『大鏡』の兩作品と比べると、『今鏡』が帝や男性貴族などの和歌作者のみならず、僧や女性などの和歌作者にも評価の目を

向けていることがわかる。また、女性和歌作者が多いことは特に注目すべきであろう。ただし、前述したように、『栄花』においても藤子内親王・藤原寛子の二人が、『大鏡』においても道綱母の一人が、女性の和歌作者としてその力量を評価されているが、人数の点から見て、『今鏡』ほどには評価の目を向けていない。

『大鏡』が『今鏡』よりも女性の和歌作者に対する関心が低いことは、男性を中心に語られた『大鏡』の性格を考えると必然的な結果とも思われる。他方、同様に多くの女性の和歌作者が登場している『栄花』と比べると、『今鏡』が女性の和歌作者の力量により注目していることは明らかであろう。

また、『今鏡』が和歌を詠む僧に評価の目を向ける姿勢は、『今鏡』『栄花』ともに登場している静円に関する記述に、その違いが歴然と現れている。『今鏡』では、

〔4〕木幡の僧正、長谷の法印などいふ僧公だちおほしき、僧正は小式部の内侍の腹なればにや、歌詠みにこそおほすめりしか。

「粟津野のすぐろの薄つのくめば」などいふ歌、採集にも見え侍るめり。失せ給ひて後も、上東門院の御夢に御覧じける、僧正の御歌、

あだにして消えぬる身とや思ふらむはちすの上の露ぞわが身はと侍りける。浄土に往生し給ふにや、いとたふとき御歌なるべし。

（ふちなみの上第四「はちすの露」(上・四二六頁)と静円について語っている。それに対して『栄花』は、後三条院の

崩御後、静円が源資綱と悲しみの贈答を交わす条において、

〔5〕木幡の僧正、源中納言資綱のもとにかくなん、

墨染に衣はなりぬ慰むるかたなきものは心なりけり

返し、中納言、

涙して衣を染むるものならば藤の袂に劣らざらまし

（卷第三十八「松のしづえ」(③・四六一頁)）

と淡々と語っている。和歌そのものや詠者の和歌作者としての力量を評価する姿勢は全く見られないのである。

和歌を詠む僧は『今鏡』十五人、『栄花』十一人、『大鏡』二人である。そのうち、和歌作者としての評価が下されたのは、『今鏡』の五人のみである。『今鏡』が、和歌を詠む僧に対してもその和歌作者としての力量に関心を抱いていたことは明らかである。

以上のように、評価されている和歌を詠む人々の位相から、『今鏡』が僧や女性の和歌作者にも評価の目を向けていることがわかった。それでは、三作品に共通して取り上げられている、位相を同じくする皇族や男性貴族に対する叙述の姿勢に関しては、差異がみられるのであろうか。以下、「階級」という視点に絞ってこの点を見ていこう。

三 階級という視点から

皇族・貴族を階級という視点から見えていくが、皇族、上級貴族、中級貴族、下級貴族の四つに分けて考察する。皇族は、さらに帝、

親王、内親王に分けて検討する。なお、上級・中級・下級貴族について考える際には、主として男性貴族に限ることとする。

1、皇族

①帝

和歌作者としての力量が評価されている和歌を詠む帝は『今鏡』三人(5.5%)、『栄花』三人(25%)、『大鏡』二人(14.3%)であり、『今鏡』は決して突出して注目しているとは言えない。むしろ比率から見れば、三作品中では最も着目していないと見受けられる。

しかし、詠者そのものの優劣のみではなく、詠歌の優劣についての評価にまで目を広げてみると、『今鏡』では後朱雀帝、後三条帝、白河帝、堀河帝の四人の御製について評価しているのに対して、『栄花』では花山帝、『大鏡』では朱雀帝と、それぞれ一人のみの御製について評価しているのである。和歌を詠む帝は、『今鏡』十一人中七人(63%)、『栄花』七人中四人(57%)、『大鏡』六人中三人(50%)である。『今鏡』は、ほかの兩作品よりも和歌を詠む帝とその詠作の評価について関心を抱いていることが分かる。

②親王

『今鏡』では、具平親王、輔仁親王、本仁親王の三人が評価される。和歌作者として評価された全五十五人という数字から考えると、三人は決して多いとは言えない。しかし、『大鏡』では和歌を詠む親王が一人も語られていないことから比較すると、三人という数値は少なくないであろう。『大鏡』では三十人の親王が登場しているが、

一人も和歌を詠むことが語られていない。また『栄花』では、和歌を詠む親王として具平親王と師明親王の二人が語られるが、具平親王のみ詠者としての評価が下されている。師明親王はその詠歌を挙げるのみである。

兩作品と対照してみると、『今鏡』において和歌を詠む三人の親王の評価が共に示されているのは、関心度が高いことを現しているよう。

③内親王

和歌を詠む内親王は、『今鏡』では三人、『栄花』六人、『大鏡』三人であり、『栄花』が最も多い。ただし『栄花』では、禊子内親王一人のみ和歌作者としての力量が評価され、他の五人はすべて和歌そのものへの言及にとどまっている。それに比べて『今鏡』では、詠者としての評価は禊子内親王一人であるが、和歌そのものの評価について触れているのは二人であるため、その関心も少なくないと思われる。このような傾向は、前述した女性の和歌作者に評価の目が向けられている事にももちろん関連しているのであろう。

皇族を帝、親王、内親王に分けて分析し、和歌を詠む皇族に対する評価の目について検討してきた結果、『今鏡』が『栄花』『大鏡』の兩作品より関心度が高いことは明らかになったといえる。

2、男性貴族

①上級貴族

『今鏡』で和歌作者としての評価が下される五十五人のうち、上級貴族の人々は藤原公実等の二十四人(43.6%)である。一方、『栄花』

では十三人中の四人(30.8%)であり、『大鏡』では十四人中の八人(57.1%)である。『今鏡』は『栄花』より人数が多いものの、『大鏡』ほどではない。

②中級貴族

『今鏡』で和歌作者としての評価が下される五十五人のうち、中級貴族は源雅光などの十人(18.2%)で、『栄花』では十三人中の三人(23.1%)、『大鏡』では十四人中の二人(14.3%)である。『今鏡』は『大鏡』より多いものの、『栄花』ほどではない。

③下級貴族

『栄花』が下級貴族の和歌作者について触れていないことは既述したので、『今鏡』と『大鏡』で比較してみると、『今鏡』で和歌作者としての評価が下される下級貴族は柿本人丸の一人(1.8%)のみであり、『大鏡』では凡河内躬恒と曾祢好忠の二人(14.3%)である。

以上、男性貴族に関して検討してきた点を比率から見ると、『今鏡』は、男性貴族における和歌作者としての評価について、階級による差異を見せていない。しかし評価の表現に着目すると、その違いが露呈してくる。(表1参照)この点についていまま少し説明を加えよう。

『今鏡』が上級貴族と中級貴族の和歌作者を「歌詠み」として評価する傾向をもつのは対照的に、『栄花』では中級貴族の二人、『大鏡』では下級貴族の一人を評するだけである。『栄花』で、中級貴族の清原元輔と大中臣能宣を「古の歌よみ」と評しているのは、先代の優れた和歌作者として見ているからであろう。これは『今鏡』の

『6』かの人丸は、かの御時より昔の歌詠みと見ゆるを。

(うちぎき第十・奈良の御代(下・四九八頁))

『7』和歌の道、昔にも恥ぢずおはしき。歌詠みは貫之、兼盛、堀河の大殿、千載の一遇とかやある人侍りける。

(ふちなみの下第六「総合の歌」(下・二頁))

と評価の仕方が同様であるので、例外的といえよう。しかしこのような例の他に、『今鏡』では源国信や藤原基俊たちなどの上級貴族や中級貴族をも「歌詠み」と評価している。一方、『大鏡』で「歌詠み」と評価されるのは下級貴族の曾祢好忠一人のみである。

『今鏡』で「歌詠み」と評価される和歌作者についての考察は、今後の別稿に譲るが、『栄花』『大鏡』の両作品より、『今鏡』は上級・中級貴族の和歌作者としての力量により着目しているといえるであろう。

《表1》和歌を詠む男性貴族についての評価の表現

評価の表現	今鏡		栄花物語		大鏡	
	上級	中級	下級	上級	中級	下級
歌詠み	8	6	1	2		1
上手	1			1	2	
おくる					1	
すぐる	1	1			2	
歌詠む	1	1			1	
いみじ			1			

うつくし	1									
よし	4	1							1	
をかし	3		1							
古の人に恥ぢず				2						
歌の道に許さる		1						1		
心たかく昔の跡を願ひたるさま	1									
さまでもきこゆ	1									
集どもに多し	2									
逸話	1									
(マイナス評価)								1		

四 多様な評価の表現

『今鏡』が「歌詠みにおはしき」「和歌の道にすぐれておはする」「歌などもよく詠ませ給ひしにこそ侍れ」「和歌などをかしく詠ませ給ひける」など様々な評価表現を持ち、和歌作者としての評価を下すことは、すでに「はじめに」のところで述べたが、それに比べて、『栄花』では「歌をいみじく詠ませ給ふ」「古の人に恥ぢずものしたまひける」「歌の上手」、『大鏡』では「和歌もあそばしけるにこそ」「和歌の道にもすぐれおはする」「和歌などこそいとをかしくあそばししか」「和歌の上手」と、評価する対象も少なく、評価表現も『今鏡』ほど多様ではない。(表2参照)

評価の表現	今鏡	栄花物語	大鏡
歌詠み	26	2	1
上手	1	2	4
すきもの	1		
おくる			1
おはす	1		2
すぐる	4	1	2
歌詠む	2		
いみじ		2	
うつくし	1		
めでたし		1	
やさし	1		
よし	6		
をかし	3	3	1

これは、『今鏡』の執筆された時期に和歌の評論が徐々に盛んになりつつあったという時代性ともちろん無縁であるとはいえないが、『今鏡』が和歌を詠む人々について高い関心を持ち、具体的な評価の視線を持つていた事にも関係するのであろう。そして、和歌を詠む人々だけではなく、詠まれた歌々、詠歌行為、詠歌事情に対する批評も含まれることは、⁽⁸⁾『今鏡』が自ら(伝承)を伝える一員になろうとした現れであるといえよう。

《表2》 和歌を詠む人々についての評価の表現

優	いとらうありて詠む										
	古の人に恥ぢず										
	歌の道に許さる										
	心たかく昔の跡を願ひたるさま										
	さまざまきこゆ										
	集に入る										
	人丸、躬恒、貫之といふも、え										
	思ひよらざりけむ										
	めづらしくありがたき御歌ども										
	多くきこゆ										
	逸話(マイナス評価)										
合計		55	1		13				14		

さらに、評価の表現を数値で表2に示してみると、『今鏡』では「歌詠み」という評価の表現を多用していることがわかる。この点を前項で述べた上級・中級貴族を「歌詠み」と評価する傾向と考え合わせると、『今鏡』において「歌詠み」という視点が突出している事は明らかであるといえよう。

おわりに

以上、『今鏡』の和歌を詠む人々⁽⁹⁾についての概観を、先行作品の『栄花』『大鏡』と比較しつつ、その評価の目線に注目して述べてきた。

先行作品よりも和歌作者を広い位相で見つて評価する、という姿勢が『今鏡』の特色の一つと言えよう。個々の評価表現については、後日稿を改めて論じたいと思う。

※引用本文は、『今鏡』は『今鏡全釈』(上・下〔海野泰男氏、福武書店、一九八二・一九八三年〕)、『栄花物語』は新編日本古典文学全集『栄花物語』①②③(山中裕氏ほか校注・訳〔小学館、一九九五〜一九九八年〕、以下『栄花』と略す)による。引用末尾の()内に巻名・頁数の順に記載す。なお、傍線などは私に付した。

〔注〕

- (1) 拙稿「今鏡」独自の精神——(伝承)を重んじる心——(『古代中世国文学』第二十号、二〇〇四年一月)
- (2) 拙稿「今鏡」の叙述態度——伝聞表現に着目して——(『古代中世国文学』第二十一号、二〇〇五年五月)
- (3) 『今鏡』は『今鏡全釈』(上・下〔海野泰男氏、福武書店、一九八二・一九八三年〕)を用いて私に整理したものである。これら一三三人を位相別で『付表』として掲げる。
- (4) 『栄花物語』は新編日本古典文学全集『栄花物語』①②③(山中裕氏ほか校注・訳〔小学館、一九九五〜一九九八年〕、以下『栄花』と略す)を用いて私に整理したものである。

(5) 『大鏡』は新編日本古典文学全集『大鏡』(橋健二氏・加藤静子氏校

注・訳（小学館、一九九六年）を用いて私に整理したものである。

(6) 表1は「今鏡」「栄花」「大鏡」三作品の和歌を詠む男性貴族についての評価の表現を整理したものである。活用語は終止形で示した。語句や表現は五十音順に並べた。

(7) 表2は「今鏡」「栄花」「大鏡」三作品の和歌を詠む人々についての評価の表現を整理したものである。活用語は終止形で示した。語句や表現は五十音順に並べた。

《付表》 『今鏡』に登場する和歌を詠む人々一覽

〔凡 例〕

一、次ページ以下の表は、「今鏡」に登場する和歌を詠むすべての人々について、「位相」「人名」「巻・章」「例歌」「評価」の各項目毎に整理して示したものである。ただし、語り手のような架空の人物や「女」「ある人」などの不特定の人物は除外した。

二、「位相」の項目では、和歌を詠む人々を「帝」「親王」「内親王」「上級貴族」「中級貴族」「下級貴族」「僧」「女性和歌作者」の八つに分類して示した。貴族に関しては、家柄を念頭に置いて私に基準を設け、「上級貴族」は三位までの貴族、「中級貴族」は三位以下の殿上人、「下級貴族」は地下、と分類した。

三、人名は、原則として一般的に使用されている名称で表示した。

四、「巻・章」項目には、当該和歌作者が登場して和歌を詠んだ巻・章段を

(8) 加納重文氏「第Ⅲ編 今鏡・第六章 和歌」「歴史物語の思想」(京都女子大学研究叢刊十九、一九九二年)

(9) 本稿のように「評価の目線」「評価の表現」とは関わり合っていないが、「今鏡」の和歌を詠む人々に触れた論として、後藤祥子氏「今鏡の和歌」(歴史物語講座「今鏡」(風間書房、一九九七年))がある。

―チエン・ウエンヤオ、広島大学表現技術プロジェクト研究センター研究員―

示した。紙幅の関係上、巻数と章段名の最初の文字のみを掲載している。例えば、すべらぎの上第一「初春」を「二・初」と示した。

五、「例歌」の項目には、「今鏡」に挙げられた当該人物の歌を掲出したが、紙幅の関係上、歌の初句のみを掲げた。例えば、「紫の袖をつらねて来たるかな春立つことはこれぞうれしき」の場合、「紫の…」と掲げ、歌が部分的に引用された場合には、「いはねの松も君がため」のように全引用部分を掲げた。

六、「評価」の項目では、評価の仕方により「○」「△」「×」の三通りで示した。和歌作者としての評価は「○」、当該人物の詠歌に対する評価は「△」、歌のみが記載されて具体的な評価が与えられていない場合は「×」とした。

25	24	23	22		21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	位相			
上 級 貴 族														帝										人名					
藤原通房	藤原成範	藤原惟方	藤原実能		源国信	藤原公実	源顕基	藤子内親王	選子内親王	覚法法親王	覚性法親王	輔仁親王	具平親王	近衛院	崇徳院	鳥羽院	堀河院	白河院	後三条院	後冷泉院	後朱雀院			三條院	平城天皇	元明天皇	人名		
四・梅	三・鄺	三・鄺	六・花		七・武	六・竹	二・玉	一・望	二・御	八・腹	六・志	八・源	七・う	三・虫	二・春	二・白	二・玉	二・紅	二・手	一・黄	一・星	一・初	九・ま	十・奈	十・奈	巻・章			
「一夜ばかりを七夕の」	「わがために…」	「この瀬にも…」	「あひ見し夜はのうれしさに」 「庭こそ花の」		「現につらき心なりとも」 「命だにはかなからずは」	「思ひ出つや…」	「世を捨てて…」	「神垣に…」	「今はただ…」	「君はしも…」	「さだめなき…」	「夏の夜は…」	「植ゑ置きし…」	「木の間洩る…」	「我宿に…」	「虫の音の…」	「つらからば…」	「尋ねる…」	「こころあらば…」	「梓弓…」	「大井河…」	「住吉の…」	「岩間より…」	「去年の今日…」	「かすみのうちに思ふ心を」	「忘れず…」	「ふるさとと…」	「とぶとりの…」	例歌
○	△	×	○		○	○	×	△	×	△	○	○	○	○	○	○	△	△	△	×	△	×	×	×	×	×	評価		

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	位相								
上 級 貴 族																						人名								
藤原実定	藤原実隆	藤原俊成	藤原俊忠	藤原長家	藤原能信	藤原成通	藤原雅定	藤原伊通	藤原宗通	藤原教長	藤原高光	藤原公任	藤原師長	藤原公行	藤原忠通	藤原忠実	藤原師実	大江匡房	藤原頼宗	藤原頼通	藤原頼通	人名								
六・宮	六・竹	六・ま	六・ま	六・ま	六・ま	六・雁	八・伏	七・新	七・有	六・弓	六・弓	五・故	五・水	五・若	五・若	五・飾	五・浜	五・浜	五・菊	五・御	四・宇	四・薄	四・薄	二・玉	四・雲	四・雲	四・梅	巻・章		
「あやしや何の暮を待つもむ」	「雲居より…」	「庭しろたへの霜と見えつつ」	「くもりなき…」	「降る白雪の歌もなく」	「恋せよとも生まれざりけり」	「白河の…」	「三年も待たで」	「まことにや…」	「有瀬川…」	「さりとてても…」	「うちつけに…」	「草枕…」	「さざなみや…」	「ただかばかりぞ枝にのこれる」	「教へ置く…」	「浜千鳥…」	「これを見て…」	「類ひなき…」	「吉野山…」	「わたのはら…」	「世々を経て…」	「佐保川の…」	「白雲は…」	「白雲と見ゆるにしろし」	「恋はうらなき」	「雲のかへしのあらしもぞ吹く」	「ありあけの…」	「折られけり…」	例歌	
○	△	○	△	△	×	△	×	△	△	×	×	○	×	×	△	△	△	△	△	×	×	△	×	○	△	×	×	○	△	評価

69	68	67				66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48							
中 級 貴 族													上 級 貴 族																		
藤原範永	賀茂成助	藤原基俊				源兼盛	平兼盛	紀貫之	橘俊綱	藤原清輔	平実重	源俊頼	平忠盛	源頼政	源有仁	源行宗	源雅兼	藤原道雅	源師俊	源師時	源頼房	源頼房	源頼房	藤原実行							
五・故	五・水	六・梅	六・竹	六・唐	五・御	二・玉	四・小	六・絵	七・武	六・絵	四・伏	三・花	三・虫	五・御	二・玉	四・宇	十・釣	八・月	八・花	八・腹	八・源	七・有	七・夢	七・堀	七・堀	二・玉	七・堀	二・玉	六・志	六・梅	
「月の光も寂しかりけり」	×	「昔見し…」	「岩漏る清水いくむすびし」	×	×	「おのが影をやともに見るらむ」	×	「春立つ事を春日野の」	×	×	「音羽の山の今朝はかすめる」	△	△	「思ひきや…」	×	「またも来む…」	△	「私はただ…」	△	△	×	×	「ゆふしでかけしいにへに」	×	×	×	×	△	△	△	×

98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	
僧													下 級 貴 族	中 級 貴 族															
藤原彰子	藤原延子	寂照	元性法印	寛曉大僧正	行慶大僧正	覚超僧都	行尊僧正	覚雅僧都	尋範僧正	濟円僧都	仲胤僧都	永成法師	良運法師	木幡の僧正	覚忠大僧正	能因法師	紀光清	柿本人丸	源頼綱	源頼実	源頼朝	藤原統理	藤原義忠	源雅光	源頼国	藤原知信	藤原孝善	藤原公重	
一・望	一・雲	九・ま	八・腹	八・腹	八・腹	八・腹	八・源	七・武	五・故	五・飾	四・小	四・小	四・は	三・虫	一・菊	八・月	十・奈	十・敷	十・敷	九・ま	九・唐	七・武	七・武	七・根	七・敷	七・夢	七・根	六・梅	
「つかのまま…」	「見るままに…」	「雲の上に…」	「よもすがら…」	「夕暮だれの…」	「夕暮のことを見かね」	「思ひきや…」	「もろともに…」	×	×	×	×	△	△	「あたにして…」	△	△	「龍田の川の錦なりけり」	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△

115	114	113	112	111			110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99			
女 性 和 歌 作 者																					
肥後	河内	紀伊	康資王母	周防内侍			江侍従	伊勢大輔	紫式部	出雲の御	赤染衛門	出羽弁	藤原多子	皇嘉門院聖子	九条院皇子	醍景殿女御	藤原寛子	藤原妍子			
二・玉	二・玉	二・玉	四・薄	十・敷	七・根	五・御	二・玉	四・藤	二・御	一・望	一・望	一・星	一・子	四・藤	一・子	六・宮	六・弓	六・弓	六・絵	四・雲	四・藤
×	×	×	△	△	△	△	×	×	×	×	△	△	×	×	×	×	×	×	△	△	×
			〔うすはなざくら〕 〔白雲は…〕	〔天の川…〕	〔住みわびて…〕	〔いかばかり…〕 〔恋いわびて…〕	×	〔我身には…〕	〔紫の…〕	〔はやくみし…〕	〔めづらしき…〕	〔いかばかり…〕	〔紫の袖をつらねて…〕 〔万代の…〕	〔春の日に…〕	〔春ごとの…〕	〔思ひきや…〕	〔さもこそは…〕	〔あやめ草…〕	〔去年よりも…〕	〔くやしくぞ…〕	〔涼しさは…〕

133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116					
女 性 和 歌 作 者																						
小野小町	有仁室	少将公教母	有教母	越後乳母	常陸乳母	崇徳院兵衛佐	待賢門院加賀	小大進	相模	小式部内侍	美作の御	大貳三位	紀の御	備前の御	待賢門院堀河	待賢門院兵衛	撰津					
九・あ	八・伏	六・梅	五・水	八・花	八・源	八・腹	八・伏	十・敷	八・花	六・絵	四・白	四・雲	四・雲	四・藤	三・内	三・虫	七・武	七・有	二・白	七・有	二・玉	
×	○	○△	○	○△	×	×	×	×	△	△	△	×	×	×	×	△	○	×	○	×	○	×
〔夢と知りせばさめさらましを〕	〔九重に…〕	〔常磐の山は春を知るらむ〕	〔月やむかしのかたみなるらむ〕	〔さこそはかりの人はつらけれ〕	〔花よりも…〕	〔昔羽河…〕	〔君なくて…〕	〔行方も…〕	〔夏山の…〕	〔卵の花咲ける玉川の里〕	〔春の来ぬ…〕	〔ありし昔の同じ声かと〕	〔秋霧の…〕	〔忍び音の…〕	〔すべらぎの…〕	〔天の河…〕	〔露しげき…〕	〔雪と散る…〕	〔谷川の…〕	〔みな人は…〕	〔万代の…〕	×